

「文化的実践を記憶する——
ベルリンのユースカルチャー・アーカイブを事例に」

高 柳 ふ み

南山大学人類学研究所講師

Remembering Cultural Practices: The Case of the Archiv der
Jugendkulturen in Berlin

The Anthropological Institute,
Nanzan University, Assistant Professor

TAKAYANAGI, Fumi

Archeia: Documents, Information and History
No.20 November, 2025 pp.33-44
Nanzan Archives

はじめに

1. 沿革
2. シーンの当事者による教育実践
3. コレクションの諸相
4. 課題と展望

まとめ

参考文献

「文化的実践を記憶する——

ベルリンのユースカルチャー・アーカイブを事例に」

高 柳 ふ み

はじめに

ドイツ連邦共和国¹⁾の首都ベルリンには、連邦公文書館 (Bundesarchiv) の一拠点²⁾をはじめ、旧東ドイツの秘密警察文書館 (Stasi-Unterlagen-Archiv)³⁾、プロイセン文化財団枢密文書館 (Geheimes Staatsarchiv Preußischer Kulturbesitz)⁴⁾など、国家的な記憶を担う主要な公的アーカイブズが集中している。これらのアーカイブズは、国家や制度に基づいた記録管理を担い、政治・行政・社会の中枢に関わる資料を網羅的に保存してきた。これに対して、同じ都市空間には、市民や社会運動団体が自発的に運営する私設アーカイブズも多数存在し、公的アーカイブズと並行して活動している。

なかでも「自由アーカイブズ」⁵⁾は、1960年代以降の学生運動、平和運動、エコロジー運動といった新しい社会運動⁶⁾を契機に誕生した、自律的かつ非制度的な記録・保存の営みである。これらのアーカイブズは、公的アーカイブズの収集対象とされてこなかった資料を保存し、当事者自身が「記録の主体」として位置づけることによって、国家中心的な「記憶の装置」に抗う実践⁷⁾を体現してきた。こうした営みは、アレイダ・アスマン (Aleida Assmann) とヤン・アスマン (Jan Assmann) の文化的記憶論の観点からすれば、制度化されにくい「周縁的」な実践を「社会的記憶」の地平に組み込もうとする試みとして理解できる⁸⁾。さらに、ポスト＝フーコー的な批判的記憶論における「カウンター・メモリー」は、支配的な歴史や記憶の語りに抗する実践を示しており⁹⁾、こうした記憶の語りを保存・共有する「カウンター・アーカイブズ」として¹⁰⁾、「自由アーカイブズ」は国家的な知の編成や記憶の秩序に対抗する実践の場を提供しているといえる。

自由アーカイブズは1980年代以降、ハンブルクやベルリン、ミュンヘンなどの都市で次々と設立され、1990年代には再び設立の波が広がった。今日ではドイツ全土で

100を超える自由アーカイブズが活動しているが¹¹⁾、本稿ではその中からベルリンの「ユースカルチャー・アーカイブ (Archiv der Jugendkulturen e.V.)」¹²⁾を取り上げる。同アーカイブは、1990年代以降のドイツ、とくにベルリンのサブカルチャー¹³⁾に関する資料を中心に収集・アーカイブ化を行うとともに、教育活動にも力を入れており、その点において独自の役割を担っている。筆者は2025年8月に同アーカイブを訪れ、資料調査および共同代表者へのインタビューを行なった¹⁴⁾。

本稿では、ユースカルチャー・アーカイブがどのように文化的記憶を形成し、教育活動を通じて社会に再循環させているのかを、沿革・教育活動・コレクション・課題を検討しつつ、アスマンの文化的記憶論およびポスト＝フーコー的なカウンター・アーカイブズ論と接続させながら、その意義を明らかにする。

1. 沿革

ユースカルチャー・アーカイブはベルリンのクロイツベルク区に拠点を置き、1998年に作家・出版者のクラウス・ファリン (Klaus Farin) とジャーナリストのガブリエレ・ローマン (Gabriele Rohmann) を中心に設立された¹⁵⁾。設立の背景には、若者文化の歴史と現在を当事者の視点から記録・保存し、社会に位置づける場が不足していたという問題意識があった。ファリンとローマンは、1990年代半ばから、パンクなどのサブカルチャーに関する調査を積み重ねてきた。二人は、既存の公的アーカイブには収蔵されないファンジン¹⁶⁾や現場の一次資料の重要性を強く認識し、それらの収集に取り組んだ。しかし、当時これらの資料は公共図書館等から「灰色文献」として扱われ、正式には受け入れられることはなかった。結果として、周縁化され失われかねない若者文化の証跡を保存するために、自らアーカイブズを設立するに至った。この過程は、必ずしも「運動当事者自身が記録主体となる」という自由アーカイブズの典型的な成立モデルに重ならないが、制度に包摂されない文化を受け止め、それを社会的記憶へとつなげようとする姿勢は、自由アーカイブズの根本的な理念を反映しているといえる¹⁷⁾。

設立以来、ユースカルチャー・アーカイブは若者文化を単なる「流行」としてではなく、社会変化や政治運動と結びついた文化的営みとして位置づけてきた。たとえば、パンクが反ファシズム運動を触発し、ヒップホップが *People of Color* のエンパワーメントを後押ししてきたことは、若者文化が社会的実践の一部として作用してきたこと

「文化的実践を記憶する——ベルリンのユースカルチャー・アーカイブを事例に」を示している。アーカイブはこうした視点を資料収集の基盤に据え、若者文化を「文化的実践の産物」として社会的記憶を次代へとつなぐ拠点となっている¹⁸⁾。

2. シーンの当事者による教育実践

ユースカルチャー・アーカイブの大きな特徴は、設立直後から教育活動を柱として展開してきた点にある。非営利団体として恒常的な資金を欠いていた同アーカイブは、2001年以降、学校・青少年施設・博物館でのワークショップを通じて運営基盤を確立した¹⁹⁾。教育プログラムの特色は、サブカルチャーの当事者を講師として招き、参加者に「生きた文化経験」を共有する点にある。共同代表者のガブリエレ・ローマンは例として、「ヒップホップのワークショップではラッパーが若者とともに歌詞を創作し、差別や不平等を議論する。パンクの講師は音楽やファンジン制作を通じて自己表現の手段を教え、スケートボーダーは公共空間の利用をめぐる社会的課題を提示する。テクノやクラブ文化の活動家はナイトライフにおける多様性と連帯を語り、マンガ作家は作品制作を通じて社会的テーマの扱い方を伝える」と述べている²⁰⁾。こうした教育活動は単なる知識伝達にとどまらず参加者が自らの文化的背景を批判的に考える契機を提供している。

さらに教育プログラムは、差別、ジェンダー、暴力防止、メディアリテラシーといった社会的テーマと結びついている。ユースカルチャー・アーカイブは自らを「オルタナティブな現場と多数派社会の間をつなぐ仲介者」として位置づけ²¹⁾、資料保存の場を超えて社会的実践を変革する教育の現場へと展開している。これはアスマンの提唱する「文化的記憶」が単なる過去の固定化ではなく、現在との対話を通じて再構成される過程に対応していることを示している。ユースカルチャー・アーカイブはまさにその再構成を促進する場となっているのである²²⁾。

3. コレクションの諸相

ユースカルチャー・アーカイブは、1998年の開設以来、10万点を超える資料を収集してきた²³⁾。その収集方法は大きく二つに分けられる。第一に、運営メンバーや関係者が流通の限られたファンジンや、コンサート会場などの現場でフライヤーやポスターを収集する能動的な収集活動である。第二に、個人や団体からの寄贈や永久貸与である²⁴⁾。設立当初の中核はファンジンと雑誌であり、特にパンクやハードコア関連の

ファンジンとは多数集められ、アーカイブズの基盤を形成した。その後はヒップホップ、スキンヘッド、ゴス、テクノ、グラフィティ、スケートボード、マンガやアニメなど、多様なテーマへと拡大している²⁵⁾。また、資料形態は印刷物だけでなく、写真、映像・音声資料、テキスタイルやステッカーといった物的資料まで多岐にわたる。これらは日常的に消費され、本来保存の対象とされにくいものではあるが、アーカイブ化され社会的資源へと転換されることで文化史的価値を獲得する。

具体的なコレクションとしては、青少年雑誌『BRAVO』をはじめ、多様なシーンから刊行された雑誌やファンジン類が挙げられる^(図1)。これらは、若者の思想や表現、コミュニティ形成の様相を示す言説的資料として位置づけられる。ポスターのコレクションには、音楽シーンに関するものに加え、グラフィティや政治的文脈に関連する資料も含まれている。たとえば、クロイツベルク36地区のジェントリフィケーションの過程を示す「クリティカルマップ」など、都市地図を中心とした大判資料が収蔵されている^(図2)。「Reclaim Your City」プロジェクトのコレクションには、「都市の権利」運動に関連するステッカーやパンフレットなどが含まれ、都市空間の社会的・政治的再占有の動向を示す資料群として重要である^(図3)。さらに、三次元資料としては、閉業したベルリンのクラブの入場スタンプやトイレのドア^(図4)、ブラジルのグラフィティ集団「ピシャドーレス」が使用した描画用ツール^(図5)などが収蔵されている。これらのコレクションは、若者文化における実践や都市空間における文化的表象を示す資料である。



(図1) 1956年に創刊され、最盛期には週刊で180万部を記録した『BRAVO』や、1990年代のテクノシーンに影響を及ぼした『Frontpage』など ©Kathrin Windhorst



(図2) 平置きキャビネットに収蔵されたポスターや地図などの大型資料 ©Kathrin Windhorst



(図3) 「Reclaim Your City」コレクション ©Kathrin Windhorst



(図4) 2023年に経営難により閉業したベルリンのクラブ「Mensch Meier」のトイレのドア
©Fumi Takayanagi



(図5) 高層ビルの外壁にグラフィティを描くための
吊り下げ式基板 ©Kathrin Windhorst

当初はアナログ資料が中心であったが、近年ではデジタル環境下で生成される文化資料への対応が課題となっている。SNSや音源共有サイト、オンライン・フォーラムの記録は、若者文化を理解するうえで不可

欠であるにもかかわらず、体系的に保存される例は少ない。そのため、アーカイブは検索・再利用可能な形で蓄積を模索するとともに、外部コレクターとの協力を通じて映像や音源、デジタル化雑誌など膨大なデータの受け入れも進めている²⁶⁾。これらの取り組みは、将来的に若者文化の「動態的な記録」を確保する重要な基盤となることが期待される。さらに、収集資料は単に保存されるにとどまらず、研究者、教育関係者、活動家、ジャーナリスト、アーティストなど多様な利用者により積極的に活用されている²⁷⁾。また、ユースカルチャー・アーカイブにはライブラリーが併設されており、1950年代から現在に至るまでの国内外の書籍約9,000点を所蔵している。グラフィティ、パンク、フェミニズム、クィア、社会運動に関する文献も充実している(図6)。



(図6) ユースカルチャー・アーカイブに併設されたライブラリー
©Kathrin Windhorst

もっとも、こうした収集は意図的であると同時に断片的でもある。すなわち、どの資料が残され、どの資料が失われるかは、運営メンバーやコレクターの関心、保存条件、さらには社会的評価によって左右される²⁸⁾。ここには「誰が、どのような基準で、何をアーカイブズに収めるのか」という根源的な問いが存在する。ユースカルチャー・アーカイブのコレクションは、無数の失われた断片の上に成り立っており、その選択性を自覚することが、文化的記憶の営みを批判的に理解するうえで不可欠である²⁹⁾。

4. 課題と展望

現在、ユースカルチャー・アーカイブが直面している課題は大きく三点に整理できる。第一に、財政基盤の不安定さである。非営利団体として活動する同アーカイブは、会員費や寄付、プロジェクト単位の助成金に依存しており、安定的な資金確保が困難なため、長期的な計画や職員の継続的雇用を見通すことが難しい。第二に、資料保存

「文化的実践を記憶する——ベルリンのユースカルチャー・アーカイブを事例に」の問題が挙げられる。ファンジンやフライヤー、ポスターといった紙媒体や、VHSなどの映像資料は劣化が早く、適切な保存環境の整備やデジタル化が不可欠だが、そのための設備やコストが大きな負担となっている。第三に、社会的な理解の不足も大きなハードルである。若者文化やサブカルチャーに関する資料は長らく学術的・文化的に「周縁視」されてきたため、それを保存する意義を社会に伝え、支持を得ること自体が課題となっている³⁰⁾。

今後の展望としては、まずデジタル化の推進が重要である。財政的・技術的制約はあるものの、オンライン公開を進めることで、多様な利用者が資料にアクセスできる環境を整備することが期待される。また、コレクションの拡充も重要な課題である。これまで十分に収集されてこなかったクィア文化や移民コミュニティ、さらにはグローバルサウスにおけるサブカルチャーなどを積極的に取り入れることで、若者文化の歴史をより多様かつ包括的に記録できるだろう³¹⁾。これは記憶の包摂性を広げる試みであり、アスマンのいう「文化的記憶」をより多様な社会主体によって構成することにつながる。あわせて、博物館や教育機関との連携を深めることにより、ユースカルチャー・アーカイブは公共に開かれた知識基盤として、社会との関わりを一層強化していくことが求められている。

まとめ

序論で提示した「若者文化の記録が公的な場から取りこぼされてきた」という問題に対し、ユースカルチャー・アーカイブは自由アーカイブズの理念を継承しつつ、その空白を埋める役割を担っているといえる。この事例は、アスマンの文化的記憶論の視点から³²⁾、「周縁的」な文化実践が保存的記憶として蓄積され、やがて機能的記憶として社会に新たな意味をもたらす契機を提供していると理解できる。同時に、ポスト＝フォーコー的なカウンター・メモリー論の視点からは、国家中心の記憶秩序に抗うオルタナティブなアーカイブズ実践として位置づけられる。

さらに、教育プログラムを通じて記録を「生きた知」として次世代へ継承する取り組みは、単なる資料保存にとどまらず、アーカイブそのものの社会的意義を拡張している。これは、アーカイブズが単なる資料の保管場所ではなく、社会的対話や文化的再構築を促す場となりうることを示している。つまり、ユースカルチャー・アーカイブは資料保存によって過去を固定化するのではなく、現在との対話を通じて新たな文

化的意味を生み出し続ける「動態的なアーカイブズ」としての役割を果たしているのである。

このように、ユースカルチャー・アーカイブは「散逸の危険にさらされやすい文化的産物」を収集・保存することで、過去の文化的実践を記録化すると同時に、現代社会における教育の場として機能している。一方で、この収集活動は誰がどのような基準で何を選び取るのかという問いを避けて通ることはできない。運営メンバーの収集方針や寄贈者の関心、社会的評価の違いがコレクションの形成に影響を与える以上、アーカイブズの営みは常に選択的かつ断片的であり、その選択性を批判的に認識することが重要である。将来的には、より多様な文化実践を包含し、社会的対話を通じて新たな記憶の地平を切り開くことが期待される。

註

- 1) 以下ドイツと記す。
- 2) 連邦公文書館の本部はコブレンツにあり、全国に23か所の拠点が設置されている。
- 3) 旧東ドイツの国家保安省が収集した文書、音声および画像等の資料は、1990年の統一後、連邦政府担当官（BStU）の管轄下にあったが、2021年に連邦公文書館に移管された。
- 4) かつてブランデンブルク・プロイセン国家の中央公文書館であった機関。主にホーエンツォレルン家、プロイセン軍、地方当局、政治組織、地図などの文書を所蔵している。1963年以来、プロイセン文化財団に属している。
- 5) 「草の根アーカイブズ」(Archive von unten)とも呼ばれるが、本稿では、「自由アーカイブズ」(Freie Archive) の呼称および訳語を使用する。
- 6) 19世紀以降の労働運動や女性運動に対して、ここでは1960年代以降に成立した社会運動を指す。Bacia 2020.
- 7) Foucault 1976 [1975].
- 8) Assmann 1999.
- 9) Hutton 1993; Sturken 1997.
- 10) Caswell 2016.
- 11) 自由アーカイブズの一覧と各アーカイブズ間の連携については以下参照。
<http://www.bewegungsarchiv.de/>（参照2025-09-01）
- 12) “Jugendkulturen”はドイツ語で「若者文化」（複数形）の意味である。本稿では、「ユースカルチャー・アーカイブ」と訳す。
- 13) 本稿で扱う「若者文化」は、音楽やファッション、ライフスタイルといった表層的な流行に限定されるものではなく、世代的経験を基盤とし、しばしば社会変化や政治運動と結びつく文化的実践の総体を意味する。その内部には、メインストリームや制度に対抗して形成される「サブカルチャー」が位置づけられる。本稿では文脈に応じて両者を区別して用いる。

- 14) 2025年8月21日にユースカルチャー・アーカイブに於いて、共同代表者の両名、教育プログラム担当のガブリエレ・ローマン（Gabriele Rohmann）および、コレクション担当のダニエル・シュナイダー（Daniel Schneider）にインタビューを行った。
- 15) Farin & Rohmann 1998.
- 16) 特定のテーマに関心をもつ人々が自主制作する出版物のこと。
- 17) Fiedler & Rappe-Weber 2001.
- 18) Farin 2004.
- 19) Archiv der Jugendkulturen e.V. 2006.
- 20) 2025年8月21日に実施したガブリエレ・ローマンのインタビューより引用。
- 21) Farin 2004.
- 22) Assmann 1992.
- 23) コレクション概要については、Schneider 2021. およびアーカイブのウェブサイトに詳しい。
<https://jugendkulturen.de/sammlung.html>（参照2025-09-01）Schneider 2021, S. 20.
- 24) 例えば、2011年に亡くなったプラネットコム（Planetcom）元代表ラルフ・レギッツ(Ralf Regitz)の遺品・コレクションが永久貸与されている。運営していたUFOやE-Werkなどのクラブからラプパレードまで、ベルリンのテクノシーンの歴史が記録された資料である。
- 25) Rohmann 2010.
- 26) Archiv der Jugendkulturen e.V. 2019.
- 27) Fiedler 2015.
- 28) Schenk 2002.
- 29) Fiedler & Rappe-Weber 2001, S. 45.
- 30) Archiv der Jugendkulturen e.V. 2021.
- 31) Rohmann 2018.
- 32) Assmann 1992.

参考文献

Archiv der Jugendkulturen e.V.: Tätigkeitsbericht 2001–2005. Berlin, 2006.

Archiv der Jugendkulturen e.V.: Jahresbericht 2018. Berlin, 2019.

Archiv der Jugendkulturen e.V.: Jahresbericht 2020. Berlin, 2021.

Assmann, Aleida: Erinnerungsräume. Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses.
München: Beck, 1999.

Assmann, Jan: Das kulturelle Gedächtnis. Schrift, Erinnerung und politische Identität in frühen
Hochkulturen. München: Beck, 1992.

Bacia, Julia: Bewegungsarchive in Deutschland. Wiesbaden: Springer VS, 2020.

Caswell, Michelle: "Toward a Survivor-Centered Approach to Records." *Archival Science* 16,
no. 1 (2016): 33–50.

- Farin, Klaus und Rohmann, Gabriele: Archiv der Jugendkulturen. Berlin: Archiv der Jugendkulturen, 1998.
- Farin, Klaus: "Dolmetscher zwischen den Szenen und der Mehrheitsgesellschaft. Das Archiv der Jugendkulturen in Berlin." In: *Aus Politik und Zeitgeschichte* (2004), S. 32–39.
- Fiedler, Gudrun: Jugendkulturen im Archiv. Bremen: Edition Temmen, 2015.
- Fiedler, Gudrun und Rappe-Weber, Susanne: Sammeln – erschließen – vernetzen. Jugendkultur und soziale Bewegungen im Archiv. Bremen: Edition Temmen, 2001.
- Foucault, Michel: Überwachen und Strafen: Die Geburt des Gefängnisses (W. Seitter, Übers.). Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1976. (Originalwerk veröffentlicht 1975)
- Hutton, Patrick: History as an Art of Memory. Hanover, NH: University Press of New England, 1993.
- Rohmann, Gabriele: "Fanzines als Quellen der Jugendkultur." In: *Mediale Jugendkulturen*. Berlin: edition sigma, 2010, S. 55–70.
- Rohmann, Gabriele: "Queere Jugendkulturen im Archiv." In: *Diversity Studies* 2018, S. 89–104.
- Schenk, Irmela: "Zur Fragmentarität des Archivs." In: *Archivalische Zeitschrift* 85 (2002), S. 201–218.
- Schneider, Daniel: Bibliothek & Sammlung. Berlin: Archiv der Jugendkulturen e.V., 2021.
- Sturken, Marita: Tangled Memories: The Vietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering. Berkeley: University of California Press, 1997.